

ダンジョンにこそ響け我が愛の唄

ベニヤ板

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

交通事故で死んだ一般人のA君。

転生特典は・・・f a t eのファントム！

「はっ？」

オリ主は最終再臨を知らなかったために仮面を外さない！

さらにいろいろな食い違いから生じる勘違いの連続！

頑張れ、ファントム！

## 目次

転生にこそ響け我が愛の唄	1
勘違いにこそ響け我が愛の唄	6
ちよつと気になる女の子にこそ響け我が愛の唄	13
気になる女の子が盛大に勘違いを起こしたけど響け我が愛の唄	20
がつつりビビりまくっている後輩にこそ響け我が愛の唄	27
愉悦にこそ響け我が愛の唄	31

## 転生にこそ響け我が愛の唄

ある日、一人の男が命を落がち。なんてことはない、ただの交通事故だ。1, 2週間もすればニュースにも取り上げられなくなり、その事故を覚えているのは最終的に男の家族と友人だけとなるだろう。

しかし……彼がいた世界では、ね。

どういうことかって？それはね……

「僕が君を転生させるからさー！」

「は？」

い、今起こったありのままを話すぜ！交通事故にあつたかと思つたら変な場所に変な奴に突然僕が君を転生させるからさー！と言われた！な、何を言ってるのかわからねえと思うがオレも最初何が起こつたのかわからなかった。(以下省略)

「だーかーらー、僕が君を転生させるの！異世界に！」

「は、はあ……どうも？」

いまいち状況がつかめずに歯切れの悪い返事をしてしまうが、この変な奴はそのことを無視して話を進める。

「異世界に転生させるが、悪いが転生先はこちらで指定させてもらおう！」

「あ、そうですか……」

いや、まあそれでも人生不完全燃焼で終わった身としてはありがたいけども？

「因みに転生特典はf g oの……そうだな、アサシンのサーヴァントの中から僕が選ぼう！」

f g o、そのゲームは知っている、というか実際オレもやってた。しかし選ばしてくれないのか、残念。

「はい、じゃあせめてもの情けだ、多少なりと要望を聞いてあげよう。」  
今だ自己紹介すらない変な奴にそう問われた。

要望か……そうだな、アサシンか。異世界ともなると戦闘の機会は少なからずあるかもしれない。その際に敵に不意打ちあるいは敵から逃走する際に気配遮断があるといいな、うん。

「じゃあ高い気配遮断スキルがあるサーヴァントで。」

「OKOK！じゃあその要望のもと君自身の力となるサーヴァントを決めよう！」

それじゃあよき異世界ライフをく

その瞬間、オレの意識は途絶えた。

「ん、んん………」

目が覚めるとそこは錆びれた教会のような場所だった。どうやら自分は教会にある講壇にもたれかかって地面に座っていたらしい。

恐らく転生は無事に終わったのあらうと、自分の装いを確認してみる。執事のような紳士的な服装で、手には白い手袋をしている。顔の右半分は仮面をかぶっているようで、自分ではどんなデザインの仮面かは見えないが察しはつく。

これ……ファントムだな。フルネームはファントム・オ  
ブ・ジ・オペラ。

……おかしいだろ!?なんでファントムなんだよ!?確かにあいつ気配遮断スキルAで持つてるよ!でも、でもな!普通そこはハサンとかだろ!?!いや、ハサンもハサンで外見がアレだから困るけども!ファントムも外見的にやべえじゃねえか!むしろハサンよりやばいわ!

(このオリ主は第三再臨以降のファントムを見たことがありません。マジで素顔がヤバイと思ってます)

ああ……しかもオレ、前世童貞のまま魔法使いで死んだの思い出した……ていうかなんであの変なやつについてのことを聞かなかったんだ……しかもあの時、普通に死

んだこと受け入れてたが、これ十中八九あの変な奴に精神いじくられてたんじゃん……。だっておかしいもん、自分で選べない上にサーヴァントのクラスがアサシン限定について残念の一言で済ますわけないやん……。あの野郎ふざけやがって……。本当になんでファントムなんだよ……。なぜ色々抵抗しなかったオレ……。ああ、精神いじくられたからか……。涙出てきたよ……。

「ああ……。オレは……。どうしてこんな……。せめてアサシンならサンソンの方が……。」

「ん？中に誰か……。って、ええ!？」

「ちよ、どうしたんだい!？」

「あ、見られた。」

「で、本当になんでうちの教会で泣いてたんだい?」

「ど、どうしよう……。あのあと案の定お部屋へと通され事情聴取の流れに……。なんでって、変な奴に精神いじくられた上にファントムにされたから、なんて言えるわけがない。言い訳なんて考えてもいないし何よりこの廃教会に人が住んでるなんて思わなかった。」

「いやー、しかしこの子、外見に似合わないレベルのモノをお持ちのようですねー（現実逃避）」

「……。答えづらいならこの質問は後だ。そもそもなんで協会にいたんだい君は?」

「いや、ほんとなんででしょうね!」

「それは私にもわからない。」

「気が付いたら講壇に寄りかかって地面に座っていた。」

因みに喋り方はファントムに少し寄せてます。なんか理由はないけどこつちのほうがち落ち着く。……絶対これも精神弄られてる。

「わからない……………ってことは記憶喪失か何かかい？」

「いや……………」

ん？待てよ。記憶喪失ということにしておいた方が何かと都合がいいかもしれない。この辺りの事も忘れちゃった、とか言えばこの人は気がよさそうだし教えてくれそう。この世界はまだオレにとっては未知数、自然な形で情報収集ができそうだ。

「……………いや、確かに君の言う通り、ある意味私は記憶喪失のようだ。」

ここがどこなのかさえ分からない。

よければ、色々教えてもらえないだろうか？」

このような純粋な子を騙すのはいささか罪悪感を感じるが、緊急事態だ。それにこの世界の記憶はない、つまりある意味記憶喪失！嘘は言っていない。さあカモン！情報カモン！

「……………わかった。嘘も言っていないようだし色々教えるよ。」

ありがてえ！

その後のこの子の話では、ここは巨大迷宮の上に建てられた迷宮都市オラリオ。ここでは迷宮探索、および迷宮内で自然発生するモンスターと戦う職業である冒険者というものがあるらしい。冒険者は地上に降りてきた神々から恩恵フェルトというものを授かるらしい。恩恵を授かるとステータスアップ、な必要するに身体能力を向上させられるらしい。また、神々は地上に降りる際に神としての力を無くすそうなのだが目の中の人間が嘘を言っているのかどうかを判断できるらしい。

「で、私もその神の一人、ヘステイアだ！」

「……………」

あつぶねええええええええええ!!良かった！本当でもあり嘘でもないこと言つといてよかった！あの場面で嘘なんてついたら見た目と相まって怪しさ満点じゃんか！いやこの見た目の時点で怪しさ満点だけど！

「君の名前は何だい？」

「私の名は……そう、ファントム。ファントム・オブ・ジ・オペラ。」

「ふくん、変わった名だね。」

「なんかこう名乗るのがしつくりくる。どうせあの変な奴の仕業だ。今度会ったら八つ裂きにする（物騒）」

「では、私はそろそろこの辺で」

「え、行っっちゃうのかい？」

「そう長い時間居座っていても、そちら側にとって迷惑というもの。」

「……行く当てはあるのかい？」

「ていうかお金、持ってるのかい？」

「……」

「そうだ、そういえばこの世界のお金持っていないや。これじゃあしばらく野宿生活か？食料どうしよう？ていうかさすがに野宿は辛い。」

「その様子だといく当てもないようだね。」

「しばらく家に留まるといい。」

「……すまない、ヘスティア殿。しばらくお世話になります。」

「まあいつていつて……」

「それよりさ、そろそろ夕食にしようぜ！」

このあと、仮面が邪魔で食うのに難儀したのはまた別のお話。



## 勘違いにこそ響け我が愛の唄

オラリオの地下に広がる大迷宮。その中を一人の男が歩いていった。その姿、服装、歩き方からは気品を感じるが、異形の仮面を被り指からは手は血のように真っ赤、ナイフよりも鋭いかぎ爪が指から生えていた。

このかぎ爪、パツと見では指先にナイフの着いた手袋のようではあるが、間違いなく彼の指先から生えているもので、何故か手袋をする<sub>と</sub>まるで無かったものようになる。あの手袋がおかしいのかこのかぎ爪がおかしいのか、それはわからない。

彼、フアントムは女神ヘステイアから恩恵を受け、冒険者となった。さすがにニートはいやだからね、そのことを伝えたら少し渋られたがOKされたよ。

というか神様は何かこう、勘違いをしている節がある。なんかオレのやることなすこと全て重くとらえてるというかなんというか。

まあ多分教会内で泣いているところを見られたのが原因だろう。それと顔になんで仮面をしているのか、って聞かれたときにしたオレの返事も悪かった。

その時のオレの返事がこちら。

「我が顔を見る者は恐怖を知ることになるだろう」

これはどう考えてもオレが悪い。さらにこの発言のあとにあっ、言い方間違えた、やっちゃったと思っただが、その時の表情のせいで勘違いは加速した。ああ、これはあれですね、オレ勘違いされる系のオリ主ですね。こういうパターンだともう手遅れですねわかります。

………なーんてね！これは現実だ、ちゃんと口で言えば勘違いも解けることだろう！

そろそろ本題  
閑話休題

因みに今回ダンジョンに潜るのにはもう一つ目的がある。今、オレはフアントムなのだが果たしてフアントムのスキルが使えるのかどうかだ。

フアントムのスキルは無辜の怪物、魅惑の美声、精神汚染、クラス

スキルで気配遮断を持っている。

まず無辜の怪物だが、これはこのスキルの持ち主が創作物などによってそのものに対するイメージが変化し捻じ曲げられた怪物であることを示す。これは確か f g o では自身の防御力を下げる代わりに自身にスター獲得量増加を付与する。これは正直よくわからん。能力が現実となった今では一体どういった感じで働くのだろうか？後回しだ。

次に魅惑の美声。これは女性に対して魅了の状態異常を付与、なのだがまずここに異性がいるかはわからないとしたとしてそれは同業者だろう。まあ女形モンスターには通じるかもだが？とりあえず後回しだ。

次に精神汚染。言うまでもなく後回しだ。

じゃあまずは消去法でなおかつどういったスキルなのかわかりやすい気配遮断だ。

使い方はわからないが………確か自分の気配を消すスキルだったな。とりあえず気配消えろと心の中で念じる。そしてそのままダンジョン内を進んでいく。途中で何人かの冒険者とすれ違ったが無反応だったことを見るに、恐らく問題なく動作しているのだろうが、確認はしつかりと。

通路の向こう側には一匹のゴブリン。後ろからその状態で近付いていくが、ゴブリンは気付く様子もない。そのまま近づいて、近づいて、背後に立つ。ここまでして気付かないということは、確実に存在を見失っているな。いや、最初から視認などできていないか。

確か気配遮断は攻撃態勢に移るとランクが大きく下がる。腕を振り上げたら即座に、ゴブリンの首めがけて振り下ろす。彼は知らないことだが、フアントムは筋力がB、敏捷がAある。ゴブリン程度ならば命を刈り取るぐらい容易い。

ゴブリンの首が宙を舞い、体からは血しぶきが噴水のように噴き出す。それにより爪はもちろんのこと、服にまで血が飛び散ってしまった。グロイし汚い。

そしてゴブリンの死体は散々血をまき散らした後に灰になって崩

れ去り、そこには魔石と呼ばれる紫色の宝石があった。

ていうかこれ……ちゃんと洗ったら落ちるのか汚れ？確かなんちゃらソーダ？ていうのがないと服についた血って落ちないんじゃないっけ？何かしらファンタジーな魔法で汚れ落とせないかなあ……。グロイのにも慣れてかないといけないし……。「グシャアッ!!」

そんな事を考えてるうちに後ろからいつの間にかゴブリンが一匹襲い掛かってきた。振り返りざまに爪で切り裂く。どうやらこのファントムボディ、ゴブリン程度なら正面から戦っても余裕なようだ。しかしもしも反応が遅れていたならば負傷していたことだろう。魔石を二つ回収してもう一度気配を遮断する。

ダンジョン内では油断しないようにしよう。

「ファントム君、一人でダンジョンに潜ったけど大丈夫かな……」

この度、初めて自身のファミリアを持ったジャガ丸くんという揚げ物を撃っている屋台でバイトしている少女、ヘスティア。彼女は今、ただ一人のファミリアのメンバーであるファントム・オブ・ジ・オペラのことを心配していた。

それも当たり前的事、たとえ複数人で潜ったとしても死傷者が出るダンジョン、そこにたった一人で潜っていったのだ。心配しないわけがない。

それに、彼はどこか心に傷を負っている節がある。あの時、帰ってきたら何故か廃教会にいた彼。なぜか泣いていた彼。その夕日で照らされた横顔とその姿はまるで一つの芸術のようで、だけれども薄い陶器のように簡単に壊れてしまいそうな印象を受けた。

驚いて声をかけた時、彼はこちらを向いたのだが、その顔の右側につけている以上の面にはギョツとした。雪のように白く、口は耳まで裂けていて目の周りは血が充血したかのように赤く目には白目が無

くただ闇のように黒い黒色で塗りつぶしたのみ。趣味が悪い、で片付けられるものではなかった。この面を作ったのは狂気を孕んだ芸術家か何かなのか？

何故そんな仮面をしているのか、と聞いたところ、

「我が顔を見る者は恐怖を知ることになるだろう……」

こういった後に見せた彼の悲しげな表情からすべてを悟った。ああ、間違いない。彼は何か過去にあったのだ、と。もともとそんな節は合った。

何故こんな廃教会にいたのかと聞いた時、わからないと答えた。これは嘘ではなかった。しかしこの後、彼は自身を記憶喪失だ、といった。それは嘘だった。その時はまた後で色々聞けばいいだろうと思っていた。

だが、これでほぼ確定だろう。彼は思い出したいくない程の過去を背負っている。心底忘れたと思うほどの。あの狂気じみた仮面もそれが原因なのだろう。……彼の顔に何があるのかはわからない。彼が話したくないのであればそれでいい。

「ね、ねえ何かしらあれ……」

「怖いわねえ、あんなに血まみれでおかしな仮面までして……」

「なんだありやあ……」

「一体何があつたんだ……？」

何やら周りの人がある一点を見ているのに気が付いた。周りの人の視線に流され、その方向へと目をやる。

「ッ!？」

そこには、キツチリとしていた服も手袋も、髪も仮面で隠れていない左半分の綺麗な顔までもが血にぬれていたただ一人のヘスティア・ファミリアのメンバー、フアントムがいた。むしろこれでは血が付いていない場所を探す方が難しいというものだ。

「フアントム君!!」

彼女はバイト中であるということも忘れてフアントムに駆け寄って、強く抱きしめた。バイトの制服も汚れてしまっているが構わなかった。

「……………ヘステイア様？」

私は今汚れている、今触れてしまえばあなたまで汚れてしまう。」

「構わない！構わないさツ!!」

そんな事より君の事だよ！どうして、どうしてそんなになるまで……………!」

「そんなになるまで……………?」

なるほど、この血はすべてダンジョン内のモンスターのもの、我が血は一滴たりとも付着しておりません。

それに汚れは洗濯すれば落ちるもの、ヘステイア様がそんな心配に思うことなどありません。

なぜなら私はあなたのファミリアの一員なのだから。

そのようなことよりも、これを。」

そういつてファントムはズツシリとお金の入った袋を見せる。

「初日ではありますがこれほど稼げました。

これならばあなたもいずればバイトもせずに生活が可能でしょう、我が女神よ」

「返り血だとか洗濯だとか、稼ぎとかの話じゃないんだよ！

どうして……………どうして……………」

……………どうしてそんな悲しそうな顔をするんだ  
い……………」

仮面の真つ黒な目から、赤い涙が垂れている。ヘステイアにはそう見えた。

「……………換金を、していただきたい。」

「は、はい……………」

あの後も長い事潜っていたのだが、そのせいで服はモンスターの血で血まみれ、さらに町の人から奇異の視線で見られながらギルドまで来たためとても不機嫌。早く廃教会に戻ってお風呂入りたい。

「5000ヴァリスになります」

「フアツ!?!」

し、初日で、しかも一人で5000ヴァリス………これ  
はもしかしくなくとも凄いいんじゃないのか?!いや、凄いな!この調子で  
毎日稼げば生活もだいぶマシになるのでは?!いや、オレには成長の余  
地がある!ここからさらに稼ぎは上昇していくはず、この調子ならば  
ヘステイア様もバイトなんてしなくていいのでは!

ルルン気分教会への帰路についたわけだが、血まみれでルンル  
ン気分がいけなかったらしく奇異の視線はより濃厚に。気付けばま  
た不機嫌になっていた。あくあ、やんなっちゃうよまったく。人を何  
だと思っているのか。服が血で汚れない戦い方も模索していかな  
きゃな。

「フアントム君!」

「アフンツ!?!」

現実逃避のために深く考え事をしてしていると、何故かヘステイア様が  
抱き着いてきた。その際にヘステイア様の豊満なソレが押し付けら  
れる。

「(煩惱退散煩惱退散煩惱退散)ヘステイア様?

私は今汚れている、今触れてしまえばあなたまで汚れてしまう。」

「構わない!構わないさツ!!」

そんな事より君の事だよ!どうして、どうしてそんなになるま  
で………!」

「そんなになるまで………?」

はて、何のことを言っているのだろうか?そんなになるまで?別に  
外傷とかはないし………あ、もしかして洗濯のことか?そ  
れともしかしたらこの血のせいでオレが傷を負っていると勘違いし  
ているのだろうか?

「なるほど、この血はすべてダンジョン内のモンスターのもの、我が血  
は一滴たりとも付着しておりません。」

それに汚れは洗濯すれば落ちるもの、ヘステイア様がそんな心配に  
思うことありません。

なぜなら私はあなたのファミリアの一員なのだから。

そのようなことよりも、これを。」

そういつてお金がつツシリ入った袋を見せる。………それと、そろそろ離れてもらいたい。煩惱が！煩惱が！これでも男なんですよオレ!?しかも結構見られて恥ずかしいし！

「初日ではありませんがこれほど稼げました。」

これならばあなたもいずればバイトもせずに生活が可能でしょう、我が女神よ」

「返り血だとか洗濯だとか、稼ぎとかの話じゃないんだよ！

どうして………どうして………」

今にも泣いてしまいそうな感じのヘステイア様。

え………?オレ、何か悪いことしました?ど、どうすればいいんだろうか………まるで心当たりがない………

結局、その後もしばらく考えてみたがわからなかった。

ちよつと気になる女の子にこそ響け我が愛の唄

「……………ダンジョンに行っても？」

「ダメだ！」

「どうしても？」

「どうしても！」

初めてのダンジョン潜りから早半年、巷ではオレのことを怪人だ何だあだ名すようになった今日この頃。ヘステイア様は全然ダンジョンに行かせてくれない。

「お金ならボクだってバイトしているし貯金もそこそこたまっている！」

ダンジョンに潜る必要性はないだろう？」

「金とは稼がねば単立ちの季節の小鳥のようにいずれ飛んで消えるもの、その先に待つのは極貧生活のみ。」

「極貧上等さー！」

何故か毎回ダンジョンに行かせてくれない。これは困った、折角戦い方も覚えてきて第10階層ぐらいまでならいけるぐらいの実力はあるというのに。いや、気配遮断を利用すればもっと下層に潜れるだろう。

「……………では仕方ない。」

私は奏でよう、今はかなたの君への音楽を。」

廃教会に置いてあるピアノ、それはヘステイア様が君はもつと趣味に走れ！とか言つて買ってきたものだ。今のオレはフアントムボデイゆえ、最初こそうまく引けなかったが最近ではそこそこうまく弾けるようになっていた。まあいまだに試していないフアントムの宝具、地獄クリスティーヌ・クリスティーヌにこそ響け我が愛の唄はパイプオルガンのような演奏装置なのだけれども、そんなに演奏してたつけ？うくん、最後にfgoでフアントム使ったの大分昔だしな。忘れたや。

閑話休題、さあさあピアノを弾く……………ふりをして気配遮断！

「あつ！どこ行つた!？」



ハハハハさらばー!

さてさて、今日はちよつと深くまで行ってみよつかな。第9、いや第10ぐらいまで行くか。あの辺りから大分天井が高くなるから宝具の試し打ちがようやくできそうだしな。

途中出てきたウオーシャドウを爪で切り裂く。うんうん、こういう小銭稼ぎもすっかりやっていなくなっちゃね。気配遮断はダンジョン内では基本ずつとしているが、こうやってモンスターを見かけたら狩るようになっている。……この戦法のせいで武器熟練度と器用度以外のステイタスが伸びづらかったりする。あんまり体力使わないからなあ、この戦法。

「……そこにいるのは」

モンスターを倒すまでの数秒の間の気配遮断スキルの大幅低下、その場面を丁度誰かに見られたらしい。声のした方を見てみると、それは見た目麗しい女騎士様がいた。

……いや、すごくきれいな見た目をしている。思わず見とれてしまった。

「……おっと、これは失礼。

私の名前はフアントム・オブ・ジ・オペラ、日々この爪を魔物の血で濡らし、ただピアノを奏でるだけに時間を割くただの冒険者。

よろしければお名前をお聞かせいただいても？麗しき女騎士殿」  
礼儀正しく礼をする。

ていうか思ったまんまを口に出してどうするオレエエエエエエエエエエエエエエエエ!!!これじゃあただのナンパじゃねえか!いや、向こうから話しかけてきたからナンパではないのだけれども!!

「フアントム、という名前だったのね。

私はアイズ・ヴァレンシユタイン。

あなたの噂はいつも聞いているから、つい話しかけてしまいました。」

アイズ・ヴァレンシユタイン……どっかで聞いたことがあるようなないような？見た目綺麗だし街のおばちゃんとかの間で噂されているのを聞いたのだろうか？

「そうでしたか。噂、といっても私にはこれといって外見以外で特徴的なものはありません。ただ影に忍ぶのが上手いだけの、格下にも正面から挑まない臆病者にすぎません。」

「その評価は自分を卑下しすぎているように思えますが。」  
「そう言っていただけとありがたい。」

「……して、今日はお一人で？」  
先ほどから彼女の仲間らしき者の姿はない。はぐれたのか、それともソロか？

「今日は仲間には内緒でソロで来ています。」  
「どうやらぼっちだったようだ。こんな可愛らしい女の子が一人でダンジョンに潜るとか、ファミリアのお仲間はずれなやつだし。しかも装備は重装というわけではない、もし死んじやったらどうする気なんだ！↑マントと執事服でダンジョンに潜ってるやつ」

まあ、マジレスすると彼女はきつとレベル2はいつているのだろうな。じゃなければ一人でダンジョンに潜るなんてことはしないだろう。賢そうだしきつと引き際もちゃんと見極められるだろう。

「……でも、やはり一人で行かせるのは気が引けるな。よろしければですが……私がお供いたしましょうか？」  
「……いいんですか？」

「ええ、見たところもう少し下の階層まで赴く様子。しかしダンジョン内での女性の一人歩き、それは危険極まりないというもの。」

よろしければエスコートでもさせていただきますでしょう。」  
「……じゃあ、お願いします。」

＼（＾o＾）／オワタ

いや、何がオワタなんだよって？それはね？ここね？第二十階層なんだ。

うん、変だとは思ってたよ。14と15階層を超えてきた辺りから変だなって思ってたよ。だってどう考えてもソロで来るようなところじゃないもん。今、やっと気づいた。

この人……ロキ・ファミアの幹部の『剣姫』だ……  
因みに彼女のレベルは5、オレは1。

第二十階層の適正レベル、2。

＼（＾o＾）／オワタ

トンボ型のモンスターであるガン・リベルラが大量に湧いて出てくる。早速気配遮断！というかこうでもしないと本当に死ぬウ!!

気配遮断のせいではほとんどのリベルラがアイズ、いや剣姫の方向へ向かっていく。ごめんよ、さすがにオレだと死にかねないから。

そんなことは気にせず普通に剣を振るう剣姫。……

エスコートって言っちゃったしオレも頑張らないと。ほぼ必要ないだろうけども！

比較的低い位置を飛んでいるガン・リベルラの背中に飛び乗る。飛び乗られたガン・リベルラはオレの存在に気付くが、背中にいれば攻撃の使用が無いようだ。必死に暴れて振り落とそうとしてくる。……普通にパワー負けて落ちてしまった。しかし落ちる瞬間、首元に向けて爪を突き刺して空中にとどまる。そのまま魔石をほじくり出す。モンスターは魔石が取り出されるとその場で灰になって崩れ落ちるからこうやればオレでも格上ではあるが倒すことができる。

地面に着地するともう一体こちらへ飛んできて突進攻撃をしようとする。体を捻り逆に頭に爪を突き刺し、そのまま頭から胴、尻にかけて切り裂いていき、ガン・リベルラは三枚におろされる。オレの爪、超鋭いやん。まさかこのモンスターにも刃が通るとは。

「……ん？他のガン・リベルラはどこへ行つた？結構  
沢山いたはずだが……。」

「そちらも終わりましたか。」

「……。」

も？そちら、も？

「そういえば、明らかに彼女の腰の、恐らく魔石を入れる用のポーチ  
がパンパンに。」

「……オレ、まだ二体しか倒してないのに一人であの数を  
倒したのか。」

「エスコート、いる？いらぬよね？オレなんかのエスコートいらぬ  
いよね？」

「え、ええ、襲い来るモンスターはすべて崩れ落ち、灰となつて虚空に  
消えてゆきました。」

「そのようですね」

「避けて!!!」

「えっ?」

「振り返つてみ……ようとしたら脚がもつれてこける。  
女の子の前で足がもつれてこけるなんてダサイ真似はしたくない  
い……!!!」

「身体能力にものを言わせ、学生のような女の子の前でかつこ悪いと  
ころは見せたくないという気持ちでそのままバク転をする。ふと見  
てみると剣姫さんもその場を離れており、自分達が立っていたところ  
は一瞬で剣山のように針が大量に突き刺さった。」

「結果的にかつこよく回避できたことになった、つてそんなこと言つ  
てる場合じゃねえ！」

「上空を見ると、さつきとは比べ物にならないほどの量のガン・  
リベルラがいた。ガン・リベルラは尻から針を飛ばすことができる、  
そんなのがこの数！」

「……仕方がない」

「試したことが無いから不安だが、やるしかない。いや、そもそも今  
日試す予定だったし、丁度いい。」

「本来ゲームでは必要のなかつた詠唱を始める。」

「私は歌う。」

「この世界を呪いながら」

「一体、何を……」

アイズの疑問は無視され、そのままファントムは何かをつぶやき続ける。

「私は歌い続ける、君への愛を、世界への憎悪を。」

何故ならこの世に君ほど価値のあるものはないのだから、君の声を隠すこの世界に価値など無いのだから。」

すると、彼らの周りが一気に暗くなる。それは光の一切が遮断され、その中にいると一種の寂しさすら覚えてくるほどの暗闇。一寸先すらも何も見えない。どこになにがあるのかは当然のごとく分からない。さらにただ暗いわけではない。そこはまるで引き込まれるような暗闇、大量にいたガン・リベルラの羽音すらも聞こえない。まるで空間のみが別の場所へ隔離されているかのようだ。

ポツポツと、紫色の小さな明かりがついていきアイズや大量のガン・リベルラ、そして辺りを照らす。どうやらその明かりは蠟燭にともされているようだが、果たしてこの蠟燭はどこから来たのか、それはわからない。しかしその明かりは弱弱しく、この空間全体を照らすには至らない。

「私と唄おう、あの舞台でもう一度。」

陽の光など忘れるほど暗く、固く閉ざされた石と鎖と革の部屋で、喉が枯れるまで何度でも！」

そして、明かりはファントムの姿も照らし出した。

「唄え唄え我が天使——」

まるで演劇のような身振り手振り、誰かに語り掛けるようにそうつぶやく。そうすると地面から巨大なパイプオルガンに似た演奏装置がまるで植物のように、されどそれとは比にならないスピードで生えてくる。

その鍵盤のもとにはファントムが立っている。そして今、音を奏でる。その音を奏でるさまは壊れ物を触るように優しく、明確な敵意を込もっていた。

「地獄にこそ響け我が愛の唄!!」

演奏装置から音が奏でられる。その音には魔力が込められており、使用者と、使用者の味方以外に不可視の魔力攻撃を振りまく。媒体が音であるためにその効果範囲は絶大。それゆえ、ガン・リベルラの大群はことごとくが灰になり、魔石のみを残し消滅させた。

地獄にこそ響け我が愛の唄

かつてオペラ座の怪人が犠牲者の死体で形作った歪んだ愛のカタチ。歪んだ情熱と狂気のと織りなされる音楽は緻密でありにも冒瀆的。

この宝具は対軍宝具に分類されるため、相手が多数の際には無類の強さを誇る。これが、ファントムが唯一持つ宝具だった。

(.....地味に、いや結構詠唱恥ずかしいな。)

この場にはアイズもいる。例えるなら部屋に招いた彼女に黒歴史ノートを見られたような感覚だと思えば今の彼の心情はわかるだろうか？

ともかく、一人の時以外はこの宝具は絶対に使わないと決めた。

## 気になる女の子が盛大に勘違いを起こしたけど響け 我が愛の唄

その日は、ファミリアの面々には内緒でダンジョンに来ていた。まだまだ私は弱いと、もつと強くならなければと強く思っていたがための行動だ。日帰りで行けるとしたら第二十階層程度、出てくるモンスターも今の彼女、アイズ・ヴァレンシユタインにとっては脅威とはなれないため行ってもほとんど意味は無い。意味は無いのだが、ちよつとでもそれで強くなれるならばやるまでだ。

だからその日、日帰りで変えることも考えてちよつと速足で階段を下り下の階層へと歩を進めていっていた。

そんな時に、なんてことはないことではあるが、下の階層への階段の最短距離の道にウォーシャドウが一体、一体だけいたのだ。別に一体程度倒すのに時間はかからない。ただ剣を一回振るえばそれで終わり。こんなことも結構よくあったのでいつも通りに倒すために剣に手をかけた。

そして、ウォーシャドウは切り裂かれた。されど彼女の手によってではなく、別の者の手によってだが。

「……………そこにいるのは」

ウォーシャドウを切り裂いた男は、手には指先に刃のついた手袋？のようなものをはめており、それを武器としているのだろう。一撃で切り裂いたことから切れ味の鋭さがうかがえる。そんな風変わりな武器と同様、その男の格好はダンジョンで不自然極まりないものであった。これが舞踏会の場や、屋敷で主に仕えてる者ならば違和感はない、そんな紳士のような恰好だった。そして顔は右半分だけ異形の仮面で隠している。

私は彼を知っている。いや、本名は知らないし実際に見たのは初めてだが、最近噂になっている『怪人』だ。冒険者はレベル2になるとその本人を表す二つ名がつけられるのだが、『怪人』というのは二つ名ではない。ダンジョンに単身で潜ってはことごとく生還、しかし毎回

血まみれで帰ってくることからそう呼ばれるようになっただけだ。

この前、ベートが彼の噂について話しているのを思い出した。ダンジョンで彼の姿を見たのはごく少数、しかし魔石は持って帰っているしモンスターで血まみれになっていたりすることから戦っていないわけがないのだ。このことから彼に対する噂は数知れず、ベート一人にしても大量の噂を語っていた。

曰く、特殊なスキルで透明化している。

曰く、彼は元殺人鬼で、その時の名残として人目を避けている。

曰く、彼は誰にも視認できない速さで動いている。

曰く、彼は志半ばで死んでいった冒険者たちの亡霊の集合体で、ダンジョンに入ると亡霊たちが分裂してモンスターを呪い殺している。分裂することで人間には視認できないのだ。

曰く、彼は悪魔の落とし子である。

一部信憑性のあるものから突拍子のないものまで様々。こういった噂の当事者は、基本本名も知れ渡って行く者なのだが、何故か彼の名は知れ渡っていない。所属しているファミリアだつて何故か謎に包まれており、ヘアリストス・ファミリアやロキ・ファミリアの隠し刀だとかいう噂も聞いた。確かヘスティア・ファミリアというところにも所属している、という噂が一番信憑性が高い、だったか。何でも複数の冒険者が好奇心で彼に対する情報をギルドの人間に聞いたのだそうだ。

「……………おっと、これは失礼。」

私の名前はファントム・オブ・ジ・オペラ、日々この爪を魔物の血で濡らし、ただピアノを奏でるだけに時間を割くただの冒険者。

よろしければお名前をお聞かせいただいても？麗しき女騎士殿」

たった今、怪人は、いやファントムと名乗った彼は礼儀正しく礼をした。態度や言葉遣いはまさしく紳士のそれだ。

「ファントム、という名前だったのね。」

私はアイズ・ヴァレンシユタイン。

あなたの噂はいつも聞いているから、つい話しかけてしまいました。」



一瞬、少し考えたような素振りを見せた彼は、すぐに噂を否定した。「そうでしたか。」

噂、といっても私にはこれといって外見以外で特徴的なものはありません。

ただ影に忍ぶのが上手いだけの、格下にも正面から挑まない臆病者にすぎません。」

「その評価は自分を卑下しすぎているように思えますが。」  
「そう言っていただけとありがたい。」

ただの臆病者に過ぎない？何を言うか。経歴実力本名全てにおいて謎に包まれていてダンジョンにたった一人で潜って大した怪我もせず大量の魔石を毎回持ち帰っておいてただ影に忍ぶのが上手いだけ？これはもはや謙遜を通り越して皮肉ととられてもおかしくはない。

それに……不思議だ。この男の声、綺麗な声だとは思う。ただ、それだけだ。普段なら、それだけの感想を抱いて終わりだ。しかし、なぜだかこの男と話していると気分が落ち着く、いや無理矢理落ち着かされているといった表現の方が正しい。まるで、優しく包み込むような声。温かさを感じさせる声。親しい友人のような安心する声。しかし明らかにこの感情は不自然、言い方が悪いがまるで洗脳でもされているかのよう。

※注 気になる女の子と話しているせいでフロントムが無意識に魅惑の美声を発動させてるだけ

それに彼からは、なぜだか人とは違う気配がする。普通の人とは違う、失礼だとは思いますがそのまま人間とはまた違ったものの気配がする。……本当に、何者なの、彼は？

※注 無辜の怪物のせいです。

「……………して、今日はお一人で？」

「今日は仲間には内緒でソロで来ています。」

ほう、と顔に笑みを浮かべると、こんな提案をしてきた。

「よろしければですが……………私がお供いたしましょうか？」

「……………いいんですか？」

「ええ、見たところもう少し下の階層まで赴く様子。

しかしダンジョン内での女性の一人歩き、それは危険極まりないというもの。

よろしければエスコートでもさせていただきましょう。」

……：チャンスだ。前々から気になつていた。彼がどれほど強いのかどうかを。それに、これは予感、ただの予感だが、この男は恐らく強い。謎に包まれた怪人、その強さの一端を見れば私もさらなる高みへと行けるかもしれない。

私を騙そうとでもしているのかもしれない、と思うレベルにはまだ信頼できない相手だ。まず私と共に潜るメリットが見えてこない。だが、別に構わない。騙したいのなら騙せばいい。私はあなたの強さの一端を見て自分の糧にするだけだ。

※注 ただの善意＋下心です。

「……：じゃあ、お願いします。」

ダンジョンの階層をどんどん下っていくが、彼からは何の言葉もない。何の言葉もない、つまりはどの階層でも彼の脅威となるものはないということだ。まさか無理でもしているのか、とも思ったがそんな様子はない。気が付けば二十階層まで来てしまった。日帰りすることも考えるとこれ以上下の階層までいくことはできない。

これで判明した、彼は私と同等かそれ以上の実力を持っている。

※注 不意打ちしたとしても普通に負けません。精々手傷を負わせて終わり。

この階層に出てくるモンスター、ガン・リベルラが出てくる。空を飛んでいるうえに針を飛ばしてくる。昔は結構倒すのに苦労したが、今では取るに足らない存在だ。

チラ、と彼のいたところを見てみるが、彼の姿は影も形もない。また気配を消したのだろう。どうやらまず姿を隠すのが彼の戦法のようだ。

私の方も戦闘を始めよう。

剣を抜き、相手に向けて降り続ければいつもすぐに殲滅できる。今日もすぐに殲滅できた。辺りを見渡してみると、彼はガン・リベルラをまるで魚のように三枚におろしていた。あの爪、どこで作られたものなのだろうか？あれだけ簡単にガン・リベルラを切り裂けるのならやはりヘファイストス・ファミリアだろうか。しかし、あのような特殊な武器は扱っていただろうか。恐らくは特注品か掘り出し物、もしくは別のファミリア製のだろう。

「そちらも終わりましたか。」

「ええ、襲い来るモンスターはすべて崩れ落ち、灰となって虚空に消えてゆきました。」

本当に未知数すぎる。あの爪、あの気配を遮断しての不意打ちの戦法、どう考えても一対多には向かない。なのに彼は傷どころか服に汚れ一つついてないのはなぜ？

※注 アイズにヘイトが集まっていたのとアイズが一瞬でほとんどを片付けたからです。

「そのようですね」

「避けて!!!」

少し、ほんの少し話していた隙に大量のガン・リベルラの接近を許してしまった。ガン・リベルラは尻から針を発射する。一本や二本程度ならば問題はないのだ、しかしこれだけ量が多いとなると話は別。私は立ち位置の都合で気づいたが、彼は反応に遅れて良くて負傷、悪くて死亡してしまうかもしれない。

などという疑問は浮かんた。が、しかし彼はまるでその位置に攻撃が来ることが分かっていたかの如くバク転で避けて見せた。

これは明らかにおかしい。立ち位置からしてアン・リベルラは彼の背後に現れた。それにガン・リベルラは羽音があまりしない。一体どうやって気付いたというのか。

「……………仕方がない」

仕方がないとはどういうことなのだろうか？そんな疑問を口にする前に彼は何やらつぶやき始めた。

「私は歌う。」

「この世界を呪いながら」

「一体、何を……」

私の言葉など気にせず、彼はつぶやき続ける。

「私は歌い続ける、君への愛を、世界への憎悪を。」

何故ならこの世に君ほど価値のあるものはないのだから、君の声を隠すこの世界に価値など無いのだから。」

突然、まるでこれからオペラやミュージカルの始まる舞台のように辺り一帯が暗くなった。

「いったい彼は何をしているの？何をつぶやいているの？」

魔法——

？

「いや、違う。魔法のようには見えない、されどスキルならば詠唱があるのはおかしい。」

呪詛——

？

「いや、違う。言葉選びからして呪詛だが、なぜだか恨みつらみといった感情を感じない。」

「………孤独」

孤独、それに伴う寂しさ、なぜだかそれらは感じられた。それは果たして彼が作った真つ暗な空間のせいか、それとも彼本人のせいなのか、あるいはその両方か。

ポツポツと、紫色の小さな明かりがついていきアイスや大量のガン・リベルラ、そして辺りを照らす。どうやらその明かりは蠟燭にともされているようだが、果たしてこの蠟燭はどこから来たのか、それはわからない。しかしその明かりは弱弱しく、この空間全体を照らすには至らない。

しかしそれは、まるで死者を送り出す祭事の時の小さな明かりのような印象を受けた。

「私と唄おう、あの舞台でもう一度。」

陽の光など忘れるほど暗く、固く閉ざされた石と鎖と革の部屋で、喉が枯れるまで何度でも！——

「明かりはどうとう彼、ファントムの姿も映しだした。」

「唄え唄え我が天使——」

まるで演劇のような身振り手振りで、誰かに語り掛けるようにそうつぶやく。そうすると地面から巨大なパイプオルガンに似た演奏装置がまるで植物のように、されどそれとは比にならないスピードで生えてくる。

何？なんなの？さつきから起こっているこの現象は一体？それにあのパイプオルガンもそうだ、巨大で、まるでどこかの大聖堂のもののように緻密な造りではあるが、そこからは先ほど彼から感じなかった恨み、怒り、憎悪、様々な感情が渦巻いているように見える。それに、まるで人の顔のように見える部分の一つ……………

「クリス・テイラー・クリス・テイラー地獄にこそ響け我が愛の唄!!」

彼はそれを奏でだした。するとそこから、まるでとてつもない衝撃波が放たれているかの如くガン・リベルラたちが粉々になっていく。

さつき、仕方がないといったのはこういうことなのだろうか。この巨大な演奏装置は、切り札だ。それこそ一つの軍相手に致命打を与えられるほどの強力な。

そして、それと同時に彼の傷だ。それも、心の。

私は今までに

あれほど悲しそうな顔をした人を見たことが無い。

※注 初めて扱う宝具かつ失敗したらやばいということに精神に余裕がないだけです。彼は悲しんでなんかいません。

がつつりビビりまくっている後輩にこそ響け我が愛の唄

最近、自分についての噂について初めて深く知った。こういった噂というのは話題の中心が奇怪であればあるほどに尾ひれやらがついていき一気に拡散していくものだが、意外にもその話題の中心には回ってこない。まあ、要するにオレは今まで変な目で見られているのは知っていたけど噂については知らなかったというだけのことだ。

それに知った理由も大したことは無い、ただちよいと道を歩いていたら周りの人に噂されてそれが聞こえただけだ。いやー、うん。これについては本当驚いた。誰が亡霊の集合体かと、柄にもなくはつてなつた。

まあそこはいいのだ。話題になることよりも話題にならない方が辛いつてどこかの凄い人も言ってたし、これは逆に言えば常にこの街の話題の中心にいるオレはその分名声が広がるのも速いということにもなる。それにこういうのは民衆は飽きたらすぐに忘れる。今、うっかり悪い噂を現実にしなないように気を付けて名声を高めていけばよい。

だが………どうやら最近新しい噂が追加されたらしい。それは、

『ファントム・オブ・ジ・オペラは剣姫アイズ・ヴァレンシユタインと同程度の實力を持っている』

………。㊦。ハア？

いや、いやいやいや、いや。確かにルール無用の戦闘ならばレベルの一つや二つ上の相手にも勝ることができるかもしれない。気配遮断して後ろからドスツてやればいいだけだ。ガン・リベルラも真正面

からやりあえば勝ち目は無いが前回は不意打ちを成功させたのと大部分をアイズさん（レベルが上なので敬称つき）が相手取ってくれたから勝てたわけで。地獄にこそ響け我が愛の唄は単純にあのパイプオルガンが凄いだけでオレは大したことは無い。正直アイズさん相手だと気配遮断の先手を取っても勝てる気がしない。

では、なぜこんな噂が立ったのか？

まず一つ、一緒にいたせい。あの後は普通に一緒に街に戻って換金した。山分けは自分の実力的にあまりに申し訳ないのでそれぞれが倒した分だけをそれぞれ換金しようという話になった。まあ最後の全体攻撃のせいで結果的にほぼ分け前は同程度になったが、それがいけなかった。二人とも同じぐらいの魔石を持っている、これははたから見たら山分けのように映るだろう。つまり、周りからしたらアイズさんと同程度の活躍をしたとアイズ本人に認められたとみられてもおかしくはない。

二つ目は、一緒にいたせい。ただでさえオレは噂の中心にいるのにそこに劍姫が加わっても見ろ、ものすごい目立つ。さらにいえば、どうやら誰かに第二十階層から十九階層に上った所を見られたらしい。第二十階層の代表的モンスターはガン・リベルラ、それ相手に二人とも無傷、ああ二人で無双したんだなと思われるのは火を見るより明らか。

さらに三つめは一緒にいたせい。一緒にいたせいでアイズさん本人がオレの気配遮断スキルを近くににいる自分でさえ気づかないレベルで気配を隠すのが上手いと勘違いして、そこから自分と同程度かそれ以上の実力のアサンだと勘違いしたらしい。いや、これだけならばいいのだが、ワンチャンアイズさんがそのことをロキ・ファミリアの面々に話した恐れがある。その話しているところを他の誰かに聞かれ、このことからさらにこの噂の信憑性に拍車をかけた。

いや、三つ目に関しては完全に自分の推測、いや妄想ともいえるレベルだが、それを抜きにしてもこの噂は信憑性が高い。

こつちとしてはいつ死ぬかわからない階層に来たせいで足ガツタガタ震えていたがな！内心で！

そんなこんなでオレの二つ名は『怪人』から『無辜の怪物』イノセント・モンスターとなった。うん、ルビがついちやったね。まだオレ自身はレベル1なのにね。この二つ名の由来は悪名は多くせにどれも信憑性に欠けることから無辜、しかし実力が高いことは知られているのと常に怪物のような仮面を被っていることから怪物、で『無辜の怪物』イノセント・モンスター。

うん、f g oのファントムのスキルですわわかります。スター発生しそう（小並感）

で、こんな長つたらしく自分の噂やら新しい二つ名について説明したのは理由がある。

「……………」

「ガタガタガタ」

目の前の新入り君、ベル・クラネルというのだが、がこの噂のせいで凄いビビってる。

まあ……………それも仕方がないっちゃ仕方がない。彼はパツと見た感じ十代前半、まだ前世で言うところの中学生である。対してオレは肉体年齢は恐らく二十代前半、その年の差は十ぐらいあると思われしオレの場合前述した悪名（不本意）が轟きまくっている。普通に仮面も不気味だし、冒険者なのになんの武器も鎧もないどころか紳士のような服装というのは明らかにおかしい。

ていうかヘステイア様よ、そのまあ仕方ないかって感じの顔でなんのフォローも入れないとはどういうことだ？酷くないか？

……………ここはダンジョンに潜ってオレが恐くないってところを見せてやるか。

「……………君、」

「ヒッ!？」

「……………そんなに怖がらなくてもいいじゃないか。

支度をしたまえ、これからダンジョンへ行く。」

「ダ、ダンジョン……………ですか?」

「ああ、見たところ君の得物はナイフ、私の得物もナイフのようなものでね、色々と教えられるはずだ。

ヘステイア様、よろしいでしょうか?」



「……………あんまり君には行かせたくないが、こればかりは仕方ないか。

いいよ」

未だにオレにダンジョンに行かせたくないのか。まったく、前までは1人で行かせるのが危険だからだとばかり思っていたが、どうやら違うらしい。確かオレ自身は記憶喪失で通してるから別に過去に何かあったわけでもないのに。

※注 ヘステイアは何か過去にあったのだと思っています。

さて、まずはゴブリンの相手でもさせて才能を計るか。もう長い事ダンジョンに潜っているのだ、戦うさまを見れば才能のあるなしはわかるだろう。

## 愉悦にこそ響け我が愛の唄

「……………」

「(おじいちゃん……………僕の冒険、早速終わりそう……………) ガタガタガタ」

ベル・クラネルは恐怖していた。自分の目の前にいる男、ファントムに。

自分を受け入れてくれるファミリアが中々見つからないというところでヘスティアに拾われ、無事神の恩恵ファルナを授かることができた。そこまではよかった。そしてその後、ファミリアの拠点に案内されたのだが、そこでヘスティアから先輩が一人いるから紹介するといわれて地下室から出てきたのが彼だった。

その姿を見た時、その人の名前がすぐに分かった。なにせ、この迷宮都市オラリオにおいて強いものを上げるとしたらまず三名の名が挙がる。

フレイヤ・ファミリアのオラリオ唯一のレベル7、オツタル。

『劍姫』ことロキ・ファミリアのアイズ・ヴァレンシユタイン。

そして——『無辜の怪物』こと、目の前のファントム。

オブ・ジ・オペラ。

彼の噂はオラリオからは近いとは言えないベルの故郷の田舎にも広まっていた。どんな武器を使っているのか、どんな魔法が扱えるのか、どんな戦法なのか、キャリアはどのくらいなのか、仮面の下はどうなっているのか、そもそもレベルはいくつなのかなど。彼に關してわからないところを上げるときりがない。わかっているのは実力が高いらしいということだけ。

また、彼はその謎と同じくらいの量の噂が立っていた。ほとんどが悪名に近いにもかかわらず、そのほとんどが根拠が無い想像でしかない。そこから無辜の怪物という二つ名が付いたのだが、そもそもこれ

が本当に神々が決めた二つ名なのかという疑問もある。

何もかもが謎に包まれた、アイズとは対を為す最強格の冒険者、それが彼だ。

そんなどう考えても悪人のイメージが払拭することのできない男と現代日本でいうところの中学生を会わせてみよう。

こうなるのは必然である。

「……………君」

「ヒッ!？」

突然話しかけられて酷くびつくりしてしまい、こんな声が出てしまう。

こうなるのも必然である。

「……………そんなに怖がらなくてもいいじゃないか。

支度をしたまえ、これからダンジョンへ行く。」

「ダ、ダンジョン……………ですか?」

「ああ、見たところ君の得物はナイフ、私の得物もナイフのようなものでね、色々と教えられるはずだ。

へステイア様、よろしいでしょうか?」

「……………あんまり君には行かせたくないが、こればかりは仕方ないか。

いいよ」

どうやら初のパーティを組んでのダンジョン攻略の誘いのようだ。正直無事に終わると思えないというのが、ベルの本音であった。

ダンジョンに来たはいいが相変わらずベル君が怯えたまま、その姿はフアントムの（絶対に空回りする）やる気スイッチを入れてしまった。

ここはしっかりと戦い方を教えてあげなければ! 爪とナイフはどう見ても取り回しが違う気がするがどっちも似たようなものだ!

フロントムはそう思っていた。

「ベル君、ナイフというのはどれも刃渡りがどうしても短い。

それは長所でもあり短所でもある。」

「長所でもあり……短所でもある?」

「そう、例えばあそこにいるゴ布林。」

フロントムが指差した先には一匹のゴ布林。丁度よく一体でいるというのは理由があり、ゴ布林はさほど賢くないモンスターで基本的に群れで行動できたらする、できないなら群れを探さないと徘徊するという極めて単純かつ非効率的な行動をする。数の暴力というものの利点をいまいち理解していないのだ。

まだフロントムはレベル1だが、強者風に戦ってみたりしてもいいよね?という、この先の展開が容易に予想できることを考えている辺り、この男はどこか抜けている。

「それじゃあ君は少し隠れて見ていなさい。」

「は、はいー!」

適当な小石を投げつけ、こちらの存在に気付かせる。ゴ布林はそれに対し、威嚇のつもりなのか知らないが声を上げて襲い掛かってくる。

「まずは長所、それは武器自体が小さいため動きを阻害しないことだ。」

フロントムはゴブリンの攻撃を余裕をもって、かつ踊るように回避する。見よ、どう考えてもいらぬ動きでありベル君がその避け方を真似でもしたらどうするというのか。

ゴ布林はフロントムに完全に遊ばれているのを理解しているらしく、段々と苛立ってきているように見える。それによりただでさえ粗く避けやすい動きがさらに避けやすくなる。

「次に短所だ。」

ゴ布林に近づき、頭を掴んでそのままゴブリンの腹に向かい強烈な膝蹴りを叩き込む。痛みと衝撃に耐えきれなかったようでゴ布林は地面に仰向けに倒れた。今度は頭を掴んで持ち上げ、胴体に何発も膝蹴りをお見舞いする。ゴブリンの口から血が噴き出し、腹には多

くの青あざができる。

「ウ、ギギギ……………」

フアントムはこう考えていた。ゴブリンをまず弱らせて動けなくさせ、ベル君にどこを攻撃すべきかを教える。そしてその後ピンピンしているゴブリンを探し、一対一で戦わせる。まずはチュートリアルの意味合いも込めて簡単にしているのだ。

そしてゴブリンはフアントムの理想通りにまともに動けないレベルにボコボコにされた。あんまりに思った通りに事が進むものでつい顔に笑顔が浮かぶ。

「短所は刃渡りが短いためその分どう頑張っても巨大なモンスター相手だと深く刺さらないことがある。

それゆえに敵の急所を的確につく技術力が求められるのさ……………ベル君、こつちへ来たまえ。」

「は、はひ……………」

明らかにベル君はさらにビビっている。フアントムはあれ、また僕なんかやっちゃいました？というなろう系並の感想を浮かべるが、自分の奇行に気付けバカ。

「このゴブリンにどこの急所でもいいから君のナイフを突き刺してみなさい。」

「え……………わ、わかりました……………」

震える手でナイフを手取るベル。別に失敗したところで何もしやしないというのに、このビビリようはなんだ？と思うフアントムであつたが、それはひよつとしてギャグで言っているのか？

言われた通り、恐る恐るながらもベルはゴブリンにナイフを突き立てる。子供が暗殺者に暗殺の訓練を施されているように見えるのは気のせいでも何でもない。まあフアントムは暗殺者だしアサシン是非もないよね。

「ふむ……………まあ初めてだし及第点としよう。

次はちゃんと動いているゴブリンに対してだ。」

「わかり、ました……………」

もうすっかりベルは精神をやられている。肉体的には大丈夫だが

精神の疲労が凄まじいのだ。原因はいわずもがな。

「因みに言っておくが、次からは君が危険にさらされた時だけ助けに入る。

それ以外については私は一切手出しはしない。

私は身を隠しているとしよう……………」

「えっ!？」

ベルは突然、何の前触れもなくファントムの姿を見失った。目を離れたのは一瞬、ただまばたきをしただけである。その一瞬でファントムは身を隠した、正確にはかの暗殺教団のトップ、ハサン・サツバーハにも並ぶ気配遮断スキルを使用しただけだが。

通路の奥からゴブリンが数体、こちらに向けて走ってくる。罠り殺された仲間の悲痛な声を耳にしたのだろう、その目は怒りに染まっている。

「安心したまえ、私はずっと、君を見ているからね……………」

「ファントムさん！ちよつと待ってください!!」

ベルは必死に声を張り上げたが、ファントムは姿を現さない。しかしベルは彼の名を叫んだ。なぜなら――

「さすがにこの数は無理ですって!!」

ゴブリンの総数――

25体、あつという間に囲

まれてしまっていた。

新人冒険者にはどう頑張ってもさばききれない数だった。しかし、それでもファントムは姿を見せない。

――愉悦!!――)

びつくりするほどのクズ。哀れファントム、長らく（本人からしたら）理由もなく畏れられ続けたせいで軽く性癖が歪み、人が何かを恐れたりするさまに興奮を、まあ要するに愉悦部員になってしまったのだ。じゃなけりゃゴブリン相手だろうとあんな拷問じみた真似はしない。

まあ本当に危険になったらさすがに介入するつもりである。すでに大分危険だなんてことは言っではいけない。